

サン・パウロ市の経済的機能と都市的発展 (I)

—— コーヒー輸出経済期まで ——

山 田 睦 男

第 I 部 目次

I はじめに

II 集落形成期 (1560年から1870年代まで)

1. 初期国内商業期 (1560年から18世紀前半まで)
2. 初期輸出経済期 (18世紀後半から1870年代まで)

III 輸出経済期の社会経済的変容 (1880年代から1929年まで)

1. サン・パウロ市を中心とする鉄道網の成立、拡張
2. 外国移民の大量流入による市内および州内人口の飛躍的拡大
3. 金融商業機能の整備充実

IV 初期工業化期 (1900年頃から1929年まで)

第 II 部 (続稿) 輸入代替工業化期

I はじめに

ブラジルの工業の中心地であるサン・パウロ市は、今日 600 万以上の人口をもつ大都市であり、その都市景観は、ヨーロッパの中進国なみといわれる比較的高い生活水準とともに、初めて訪れる外国人を驚かせている。この都市が、1900年にはわずか24万の人口しかもたなかった、と聞けば、かれの驚きはさらに強くなろう。またほんの数十キロも旅行すれば、市内の生活とは対照的に、停滞的な、良くいえば牧歌的な生活があり、都市と農村の経済的、文化的な隔差にも驚かされる。はるか内陸のほとんど無人の後進地帯や北東部のような人口過密な貧困地帯との対比はいうまでもない。

ブラジルの経済発展は、19世紀後半のコーヒー輸出経済と、今世紀前半からの工業化を推進力と

して進んできたが、そのいずれの活動もこのサン・パウロ市を中心に行なわれてきた。このため、この都市を中心とする地域に人口や経済力の極度の集中がみられるのである(注1)。

近年ブラジルの経済成長率は上昇し、1969年には9%という高成長率を示した。その反面、国内地域間隔差、産業間および社会階層間の隔差、不均衡が拡大し、社会政治的問題のみならず、経済発展そのものに対する障害にもなりかねない(注2)。これらのいくつかの不均衡の問題は、サン・パウロ市とその限られた周辺地域に対する経済力の過度の集中から生じる問題といいかえることも無理ではない。

ある時期においては、この地域への経済力の集中は、企業にとっての外部経済となり、ますます循環的に加速される集積によってブラジルの経済発展を支えたが、最近では交通の渋滞、地価の上昇など、住民と企業にとっての外部不経済、拡散要因も感じられはじめている。国内市場拡大は一面で経済力の拡散を必要とするが、他方、サン・パウロ市の全国市場に対する金融、商業的優位は、ますます強化されているようである。

サン・パウロ市の経済的機能と都市的発展の歴史的研究は、ブラジル経済全体の問題にも深くかかわっている。たとえば、ブラジルの他の大都市を考へても、コーヒー以外の輸出農産物の生産中心地になった都市は、ベレン市(Belém) (ゴム)、レシ

第1表 サン・パウロ市の歴史的発展

時代区分(年代)	経済的機能と都市的発展
集落形成期 (1560年から 1870年代まで (本稿II章))	ブラジルの植民地的経済における周 辺的役割。半自給的小集落。緩慢な 人口増加。
1. 初期国内商業 期(1560年か ら18世紀前半 まで)	北東部の糖業地帯(16世紀中葉から 17世紀中葉まで)とミナス地方の金 鉱地帯(17世紀中葉から18世紀中葉 まで)などの輸出生産中心地への商品 (内陸原住民の奴隷、南部の家畜) の供給中継基地。内陸部植民の基地。 地方的行政中心地(1681年以後)。
2. 初期輸出農業 期(18世紀後 半から1870年 代まで)	砂糖(18世紀中葉から19世紀中葉ま で)とコーヒー(19世紀初頭以後)の 輸出農業の地方的中心地。農村人口 の増加に比べ都市人口の増加停滞。 農村の半自給性のため、都市機能充 実せず。最大人口3万1000人(1872 年)。
輸出経済期 (1880年代から 1929年まで) (本稿III、IV章)	ブラジル輸出経済の中心的役割。農 村部のコーヒー・モノカルチャー化 に対応した都市機能の充実および移 民の滞留により、都市人口の増加率、 農村人口の増加率を上回る。
1. コーヒー輸出 拡張期(1880 年代から1929 年まで) (本稿III章)	コーヒー生産に関連した生産要素お よび社会間接資本の充実。鉄道網、 自由労働力集中、消費市場拡大、金 融商業機能の充実。最大人口40万 (1910年推定)。
2. 初期工業化期 (1900年頃か ら1929年ま で) (本稿IV章)	サン・パウロ州という地方市場対象 の消費財工業の中心地。全国的には、 リオ・デ・ジャネイロ市の工業規模 を下回る。最大人口190万(1930年推 定)。リオ市の最大人口145万(1930 年推定)。
輸入代替工業化 期(1930年以後) (本稿の第II部)	国内市場を対象とする工業の全国的 中心地。全国的金融商業メトロポリ ス。内国移民滞留による都市人口の 増加。全国最大の都市。最大人口630 万(1970年推定)。

フェ市(Recife)とサルヴァドル市(Salvador)(砂糖)、
イリエウス市(Ilheus)とイタブナ市(Itabuna)(カ
カオ)のように、かなりあるが、サン・パウロ市
のように、輸出による繁栄のあとに工業化が継起
した例はなかった。いい換えればブラジルの工業
化が、なぜほかならぬサン・パウロ市で進展した
のかという問題がある。この問題は、ラテン・ア
メリカの中でも、ブラジルの工業化が相対的に進
んでいる理由の解明にもつながろう。なぜならば

他のラテン・アメリカ諸国の工業化も、ブラジル
と同じく、輸入代替方式により、輸出経済の中心
地がほとんどの場合、工業中心地にもなっている
が、その工業の発展度には、大きな差異があるか
らである。サン・パウロ市の経済的機能をブラジ
ルの経済発展との関連において歴史的に研究する
意義は十分認められるといえよう。

サン・パウロ市の経済的機能と都市的発展を歴
史的に考察する際、次の時代区分を考えることが
できる。

第1表に記したように、本稿のIIで、「集落形成
期」、III~IVで「輸出経済期」を扱い、「輸入代替
工業化期」は、本稿の続編第II部で改めて論じる
ことにしたい。ブラジルのコーヒー輸出経済から
工業化への転換の原因が、国際経済条件の変化だ
けでなく、ブラジル国内、とくに、サン・パウロ
市を中心とする地域の社会経済変容にあることを
明らかにし、ひいてはブラジル経済の現在の問題
の理解に接近することが、本稿の意図である。

(注1) ブラジルの国土面積のわずかに2.9%を占め
るサン・パウロ州が、全国人口の18.6%(1969年以下
同じ)、工業労働者の49.7%、工業総生産の57.1%、
国内所得の約34%、銀行預金残高の約37%を代表して
いた。

(注2) Baer, Werner, "Regional Inequality and
Economic Growth in Brazil," *Economic Develop-
ment and Cultural Change* (April 1964) や同著者の
*Industrialization and Economic Development in
Brazil* (Homewood, Ill., R. D. Irwin, 1965), Ch. 7,
などをみよ。

II 集落形成期(1560年から1880年代まで)

1. 初期国内商業期(1560年から18世紀前半ま で)

ポルトガルのブラジル植民地の経済は、16世紀
中葉から17世紀中葉までの北東部の砂糖、17世紀

中葉から18世紀中葉までのミナス・ジェライス地方の金のように、ヨーロッパ向けの第1次産品の輸出生産を軸に展開した。国際市況の変化、地力や資源の枯渇などによって、ときどきの主要輸出商品の生産が縮小すると当然その中心地も衰退した。他の商品が重要になると、別の地域に労働力や資本が移動した。生産中心地に労働力(原住民の奴隷)食料、家畜(輸送手段としての馬、ラバと食肉用の生牛)などを供給する後背地の配置も、当然主要輸出商品の種類が変わるたびに変化をこうむった。

地理的条件から比較的解放され、より持続的な経済活動になりうる国内市場対象の工業はポルトガルの重商主義(とくに1766年の植民地工業禁止令)とポルトガルを政治的経済的に従属させたイギリスの安価良質な製品の流入によって、内陸部のミナス地方で小規模に行なわれた製鉄業や繊維工業を除いては、ほとんど発達しなかった。

要するに、ブラジル植民地全体の経済活動は、地域間の分業関係をも含めて、ヨーロッパの植民地体制の枠内にあったのである(第1図参照)。

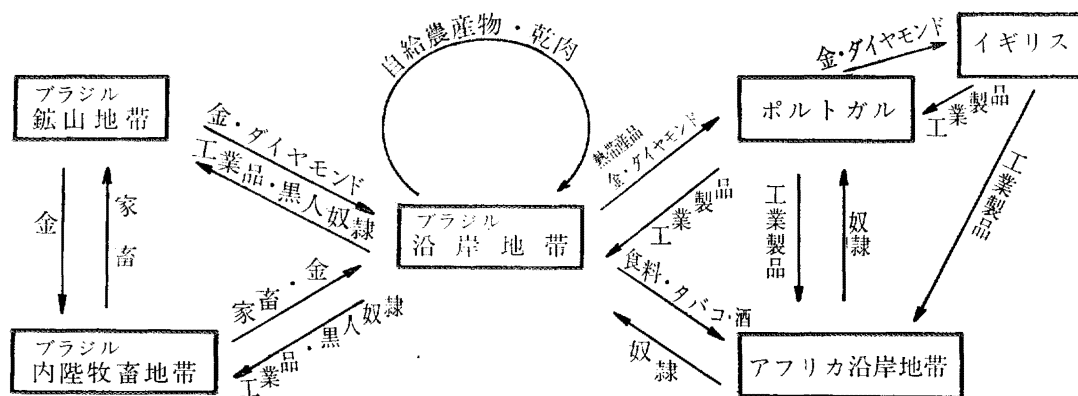
1532年に現在のサントス港に隣接するサン・ヴィセンテ(São Vicente)の島と湾に、一団のポルトガル人が入植し、サン・ヴィセンテの町を中心とする総督領(Capitania: カピタニア)が設置された。2年後港としてよりすぐれたサントスが中心地になった。

ブラジル植民地は、16, 17世紀の間、実質的には、7300キロに及ぶ長い海岸線に沿う少数の集落からなっていた^(註1)。サン・ヴィセンテ総督領の場合、例外的に、早くから内陸部の開発が行なわれたのは、農業に不利な地理的条件を克服するために行なわれた国内商業活動のためであった。

サン・ヴィセンテの海岸平野は、海岸山脈(Serra do Mar)が海にせまっているため、幅が15キロしかなく、そのうえ、湿地帯が多く、風土病が蔓延し、全体に土地生産力が低い。ここで当時の国際商品である砂糖が小規模に栽培されたが、より有利な地理的気候的条件に恵まれた北東部の糖業とは比較にならず、発展性はなかった。

そこで内陸進出が企てられた。サントス付近か

第1図 ブラジル植民地の経済活動と地域間分業



(出所) Prado Jr., Caio., *História econômica do Brasil*, 11 a. ed., São Paulo, Editora Brasiliense, 1969, p. 116
の図を一部修正。

ら、海岸山脈の最も低く通過に容易な地点（海拔約1500メートル）を選び、峠を越すと、地勢はしだいに平坦になり、はるか奥地のパラナ川までゆるやかに下り続ける。海から約80キロ、海拔約800メートルの地点で、海岸山脈を覆う原生密林がとぎれ、まばらな林のある高原があらわれる。ここでは、適当な高度のため熱帯性気候が和らげられ海岸平野や奥地に比べ、ヨーロッパ人の居住に困難はなかった。林がまばらにしかないのは、土地生産力が低いためであり、農業には不利であった。しかし当時の植民者には、密林は開拓が困難であったから林の方が望ましかった。サントスを経由して本国との連絡も無視はできなかった。こうしてこの地方が内陸進出の第2段階の基地となった。

現在のサン・パウロ市の中心に近い丘の上にピラチニンガ (Piratininga de São Paulo) というイエズス会の原住民教化部落が1554年に設立されていたが、1560年に、一般植民者の居住が認められるとともに、この集落は、植民地の最下位の行政単位である町 (vila) の地位を与えられ、防柵をめぐらした半軍事的、世俗的な開拓拠点集落となった。

ピラチニンガの住民は、有利な輸出農業の可能性がないので、金鉱探しと原住民の奴隷狩りを目的に、バンデイラ (bandeira) という遠征隊を組み、内陸に進出した。金鉱探しでは、1673年にディアス (Fernão Dias) のミナス地方での発見を皮切りとして、1730年まで、ミナス各地でつぎつぎと発見が続いた。原住民の奴隷は一部は、貧困のため、アフリカから輸入された高価な黒人奴隷を購入できないサン・ヴィセンテ総督領の農園主に売られたが、残りは、北東部などの輸出農業地帯に売られた。しかし全体としてバンデイラの活動は、ブラジル植民地の経済のなかで、周辺的であった。ブラジルの経済史家シモンセンの推計によれば、

バンデイラは、総計30万人弱の原住民を捕え、奴隷として大部分を他地方に売却したが、その収益は、同時期に行なわれた砂糖生産や約70年間行なわれた鉱業の利益のそれぞれ1%前後にすぎなかった^(註2)。

市民の生活は、当然貧しかった。当時の遺言書の分析から、一般の市民は武器と2、3名の奴隷を所有するのみで、400件の遺言書のうちで、資産家といえるのはわずか5件のみであったことが知られている^(註3)。

市民の多くは、防柵をめぐらせた市域外に農園をもち、半自給的な生活を送っていた。市部には市会、教会、商店などがあるのみで、市の人口は少なかった。総督領全体の人口は17世紀末で、約1万5000人にすぎなかった^(註4)。

このバンデイラの経済史的意義を強いて見出せば、内陸部にサン・パウロを中軸とする交通網を形成しそれにそって多くの集落を発生させたことにある。

バンデイラは、内陸部の原住民の集落を破壊した大規模な蛮行であったが、高度に商業的な側面をも備えていた。隊自体が営利会社として組織され、契約に基づき融資を受けたり、隊員の募集を行ったりした。多くの集落がおもに当時の交通路である河川にそって作られるにしたがい、バンデイラは、それらの集落を中継基地にして行なわれる隊商のようなものに変化していったのである。

こうして形成された16世紀の最遠集落は、パライバ溪谷のサン・ジョゼ・ドス・カンポス (São José dos Campos) であり、17世紀には、同溪谷のロレーナ (Lorena)、ミナス方面の交通路上のブラガンサ (Bragança)、モジ・ミリン (Moji Mirim)、南のイタペチニンガ (Itapetininga)、西のアララクアラ (Araraquara) などであった^(註5)。

ピラチニンガの町が、1681年サン・ヴィセンテ総督領の首府に昇格し、ついで1711年サン・パウロの名のもとに市 (cidade) の地位を与えられたのも、このバンデイラの貢献がポルトガル王室に認められたからである。サン・パウロを基地とするバンデイラは、その後も18世紀までにゴイアス、マット・グロッソ、アマゾン、現在のボリビア、ペルー、バラグアイとの国境地方にまで進出し、集落を作り、1494年のトルデシリャス条約で確定されたポルトガル領植民地の版図を「現実的占有」(uti possidetis) によって、西に押し広げた。

17世紀の後半に、北東部の砂糖生産は、キューバ糖との競争によって衰退し始め、ブラジル植民地の経済の中心は、当時発見されたミナス地方の金とダイヤモンドの生産と輸出に転換した。植民地の生産活動の中心地がサン・パウロに近よってきたのはよいとしても、鉱業には原住民奴隷はさほど必要とされず、バンデイラも不振になった。一時は、金鉱地帯や南の牧畜地帯に人口が流出するばかりで、サン・パウロの経済は停滞した。しかしまもなく金鉱地帯に、南部の家畜、輸入したアフリカ人奴隷、武器、弾薬、サン・パウロ付近で生産した食料などを供給し、金をサントスから輸出する商業の中継地になった。

1725年に、ミナス地方とリオ・デ・ジャネイロ港を結ぶ「新道」(Caminho Novo) が開通すると、サン・パウロとサントスは、商業機能を大幅に奪われた。反対にリオ市は繁榮し、1763年には全植民地を包括するブラジル副王領の首都となり、一時はサン・パウロ市もその管轄下においたりした。しかし、サン・パウロ市は、ミナス地方よりも内陸に発展したマット・グロッソとゴイアスの金鉱地帯を供給先とすることにより状況に適応した。同市はモンソン (Monção) と呼ばれる 定期的隊商

の基地となった。

2. 初期輸出経済期 (18世紀後半から1870年代まで)

18世紀中葉に、ブラジルの金の生産輸出が低下したので、ポルトガルの王室は、植民地からの収益を向上させるために、ブラジルに対し重商主義的統制を強化する一方、減免税などによって輸出農業の振興を図った。1755年から58年にかけて、砂糖とタバコの生産に対する減税が行なわれ、1765年以後に、コーヒー、インジゴ(藍)、米の生産に対する免減税が行なわれた。黒人奴隷の導入や白人移民も促進された。

サン・パウロ市を中心とする地域でも、この農業振興策に対応して、砂糖生産が盛んになった。主栽培地は、ジュンディアイ (Jundiá), カンピナス (Campinas), ポルト・フェリス (Pôrto Feliz), などサン・パウロ市から100キロ内外の地帯であった。国内国外からの移住によって、内陸部の人口は増加した。たとえば、衰退したミナス地方からの移民によって、フランカ (Franca), リベイロン・プレト (Ribeirão Preto) などの多くの集落が生まれた。総督領の総人口は17世紀末の1万5000人から1777年の11万6975人へ、さらに1805年の19万2729人へと増加した^(註6)。サン・パウロ市の人口も、緩慢に増加したらしく、1794年の9359人から1811年には推定2万人になっていた(第6表参照)。

1809年、ナポレオン軍のポルトガル侵攻によって、ポルトガル王室がリオ市に遷都し、ブラジルは従来の植民地の立場から、一躍ポルトガル帝国の本国になった。しかしイギリスは、ブラジルの工業化を許さなかった。1810年の対英通商条約は、イギリスのみに最恵国待遇を与えた。だから、1822年に、ブラジルがポルトガルから独立して、重

商主義的制約から解放されても、イギリスがポルトガルに代わって公然と経済的支配を強化したので、実質的な経済的独立は達成されなかったのである。ブラジルが関税自主権を獲得するのは1840年代のことであり、このため19世紀の前半は、「植民地的経済」の時代とみなされる。この時代には工業が発達しなかったが、裏面の現象として、輸出農業への特化が進んだ。

19世紀初頭には、ハイチの独立にともなう同地の砂糖生産の低下にもとづく国際市況の変化のため、ブラジルの砂糖生産が盛んになった。サン・パウロ地方でも、18世紀後半以来の中小農園による砂糖栽培が一層盛んになったが、全国的にはその意義は小さかった(第2表参照)。

第2表 19世紀初頭のブラジルの港別砂糖輸出量(年平均) (単位:箱)

港名	輸 出 量
バ イ ア	20,000
ペ ル ナ ン ブ コ	14,000
リ オ	9,000
サ ン ト ス	1,000

(出所) Singer, Paul, *Desenvolvimento econômico e evolução urbana*, São Paulo, Editora Nacional e Editora da USP, 1968, p. 26 から作表。

ブラジルの主要輸出商品としては、1830年代を境としてコーヒーが砂糖にとって代わる(第3表参照)。しかし、サン・パウロ地方でこの転換がみられたのは1850年代である(第4表参照)。そしてサン・パウロ地方がブラジルのコーヒーの中心的生産地になるのが、1880年代である(第5表参照)。以上の理由から、サン・パウロ地方の経済に限り1880年代をもって、「植民地的経済期」から「半植民地的経済期」の転換期とみなすことにする。コーヒー輸出経済期にも、海外市場への全面的依存という「植民地的経済」の特色は存続するが、

第3表 ブラジルの輸出総額に占める砂糖とコーヒーの比率

年 代	砂糖の比率	コーヒーの比率
1821-30	30.1%	18.4%
1831-40	24	43.8
1841-50	26	41.4

(出所) Singer, p. 28 から作表。

第4表 サントス港経由の砂糖とコーヒーの輸出数量

年	砂 糖	コ ー ヒ ー
1826	154,166アローバ	8,831アローバ
1828	489,650	22,640
1830	443,619	30,610
1836/37	433,268	87,559
1842/43	194,509	51,633
1846/47	597,551	236,737
1854/55	184,049	779,892

(出所) Araujo Filho, José Ribeiro de, *Santos o porto do café*, Rio de Janeiro, Fundação IBGE Instituto Brasileiro de Geografia, 1969, p. 52.

(注) 1アローバは、15キロ。

第5表 ブラジルの地域別コーヒー生産量 (単位:1000俵)

年	サン・パウロ地方	リオとミナス地方
1870	438	2,300
1880	1,210	3,300
1890	2,500	2,600
1900	7,000	3,000~4,000
1911~1930	約10,000(年平均)	約4,000~5,000(年平均)

(出所) Singer, pp. 52, 53 から作表。

(注) 1俵(saca)は60kg。

多くの社会経済的変容によって、次の工業化の基盤を造ったという意味で「半植民地的経済」という表現を使う。

砂糖生産が拡張した19世紀初頭に、近くの農村の中小規模の砂糖農園主(senhor do engenho)は、生活の本拠をサン・パウロ市に移した。独立とともに、市は中央集権的なブラジル帝国のサン・パウロ県(provincia)の県都となった。まもなく1828年にブラジル第2の大学として、市内に法学学校

が設置され、全国から600名以上にのぼる学生を迎えたことは、この小都市の重要性を高めた。

それでも近代都市の主要な機能である商工業、金融業などの発達はほとんどみられなかった。1840年代に関税自主権が確保されたといっても、関税が主要な歳入源であったから、禁止的輸入関税は課することができなかった。それにもまして工業の発達を抑制したのは、1888年まで存続した奴隷制であった。半自給的な農園でほとんどの生活必需品が奴隷の手で生産され、そうでない物は輸入されたのである。このような状況を反映してサン・パウロ市は、19世紀末までは明確な都市的性格をもたず、市の中心に茶畑があったり、地域(município)の人口の半分が農民であったりした。

人口の観点からも、注目するにたる都市的発達がなかったことがわかる(第6表参照)。

第6表 サン・パウロ市および県の人口(1811~1872年)

年	サン・パウロ市の人口(1)	サン・パウロ州の人口(2)	ブラジルの人口(3)	比率(%)	
				(1)/(2)	(2)/(3)
1811	15,000~20,000*	165,468	3,500,000*	9.9~12.1	4.7
1836	21,933	284,012	4,800,000*	7.7	5.9
1852	26,000*	468,839	8,000,000*	5.5	5.9
1872	31,385	837,354	9,930,478	3.7	8.3

(出所) Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística, *Anuário estatístico do Brasil*, 1970, Rio, IBGE, 1970, pp. 37, 38; Matos, Odilon Nogueira de, "São Paulo no século XIX," *A evolução urbana de São Paulo*, São Paulo, Revista de História, 1955, pp. 43, 44; Monbeig, Pierre, *Pionniers et planteurs de São Paulo*, Paris, Armord Colin, 1952, p. 14; Singer, p. 19.

(注) * 推定値。

第6表で注目されることは、1870年代までブラジルの人口に対するサン・パウロ県の人口比率が時とともに上昇する傾向にある反面、県人口に対するサン・パウロ市人口の比率がしだいに低下する傾向にあることである。このことは、サン・パウロ市が、明確な都市機能をもっていなかった有

力な証左といえよう。

(注1) この歴史的事実は、現在も以下の事柄に反映している。

(1)ブラジルの大西洋沿岸のすべての州の州都が、サン・パウロ州とパラナ州を除き、主要な海港と一致している。(2)上記2州の場合も、州都(サン・パウロ市とクリチバ市)は、主要な海港から海岸山脈を越えただけで、最短距離の平坦な高原に置かれている。(3)沿岸の州に比べ、内陸の州は面積が大きく、人口密度が急激に低下している。

さらに歴史的にみてもブラジルが日本の23倍という広大な国土面積をもつにもかかわらず、独立後も他のスペイン・アメリカの諸国と異なり、政治的統一性を保持できたのは、独特の帝制採用もさることながら、当時においても人口が沿岸地帯に集中し、海上交通によって比較的相互連絡が容易であったためと考えられる。

(注2) Simonsen Roberto, *História econômica do Brasil*, 1500-1820. 6a. ed. São Paulo, Companhia Editora Nacional, 1969, p. 214.

(注3) Barros, Gilberto Leite de, *A cidade e o planalto de São Paulo*, Livraria Martins Editora, 1967, Tomo 1, pp. 12~15.

(注4) Singer, Paul, *Desenvolvimento econômico e evolução urbana de São Paulo*, Editora Nacional e Editora da USP, 1968, p. 23.

(注5) Prado Jr., Caio, "A cidade de São Paulo," *Evolução política do Brasil*, 6a. ed. São Paulo, Editora Brasiliense, 1969, pp. 101~103.

(注6) Prado Jr., Caio, *Colonial Background of Modern Brazil*, Berkeley, Univ. of California Press, 1967, pp. 84, 86.

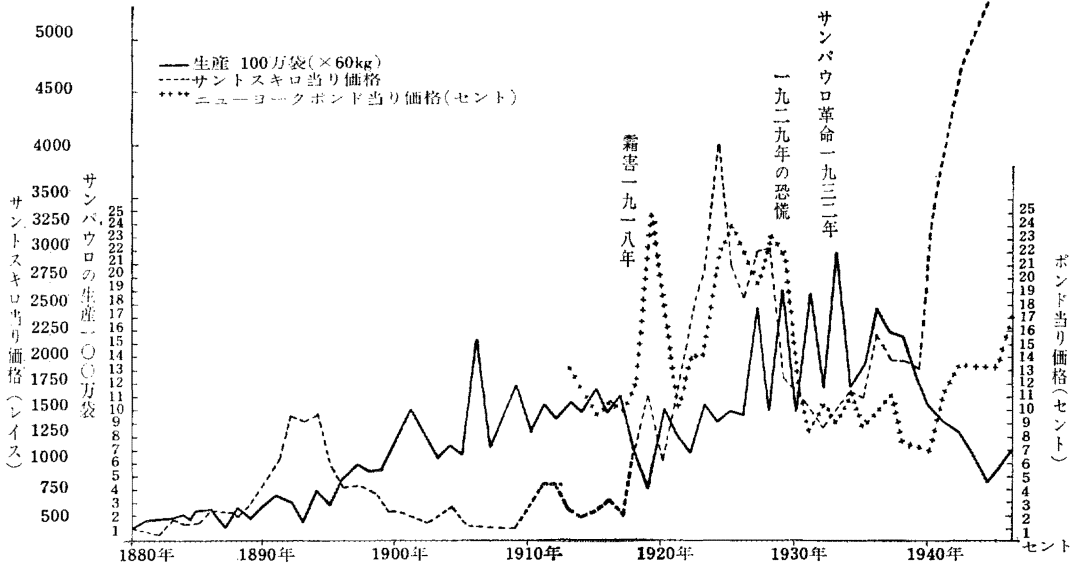
(注7) Andrada e Silva, Raul de, "São Paulo nos tempos coloniais," em *A evolução urbana de São Paulo*, São Paulo Revista de História, 1955, p. 30.

III 輸出経済期の社会経済的変容

(1880年代から1929年まで)

19世紀の中葉からサン・パウロ地方の主要輸出商品となったコーヒーは、この地方のテラ・ロッ

第2図 サン・パウロ地方のコーヒー生産



(出所) Pierre Monbeig, *Pionniers et Planteurs de São Paulo*, Paris, Armand Colin, 1952, p. 97.

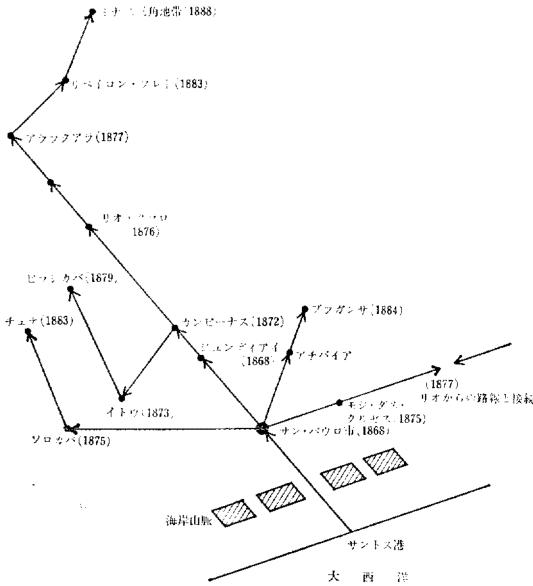
ジャ (terra roxa) という適性土壌と温和な気候、平地で大規模栽培や交通運輸に便利な地勢などの地理的条件に恵まれただけでなく、当時の目ざましい海外需要の伸びに支えられて、さらに生産の増加を示した(第2図参照)。コーヒーのような飲料は、元来それほど高い需要の所得弾力性をもちえないが、その普及期が欧米諸国の工業化と所得上昇期に合致したため、消費の上昇は顕著であった。コーヒーの生産国の数も比較的限られていて(セイロンのコーヒー園の全滅などがあった)、ブラジルがその供給をほぼ独占していた。ブラジル国内では比較的農業開発の遅れていたサン・パウロは、未開発の内陸部に初めてコーヒーという適切有利な作物を迎えたので、コーヒー経済が短期間にもたらしたサン・パウロ市の社会経済的変容には目ざましいものがあった。それらの変容の主要なものは、(1)サン・パウロ市を中心とする鉄道網の成

立、拡張、(2)外国移民の大量流入による市内および州内人口の飛躍的拡大、(3)金融商業機能の整備、充実などである。以下その順にデータを示したい。

1. サン・パウロ市を中心とする鉄道網の成立、拡張

サン・パウロ市が、コーヒー生産に関連して商業金融機能を整備、充実させ都市的發展を示すのは、1868年のサントス・ジュンディアアイ鉄道の開通後、とりわけ内陸部に鉄道網が確立した1880年代以後である。1854年には県内で生産されたコーヒーのわずか15%がサントス港経由で輸出されたが、1868年にはその比率は61%に上昇した。さらに1880年代には90%以上になった^(注1)。サン・パウロ地方が、ブラジルのコーヒー生産の中心地になったのも、同じく1880年代であった。ブラジルのコーヒー栽培の生産性は、ほとんど変らなかったから運輸、加工、商業化の合理化とコストの低

第3図 サン・パウロ市を中心とする鉄道網の拡張
(1880年代まで)



(出所) Singer, p. 38 のデータを地図化。

減が、直接生産に反映したのである。

1868年から10数年の間に、サン・パウロを中核として、鉄道網が県内西北部に向かって非常な勢いで拡張し、同時にコーヒー生産地を拡張した(第3図参照)。さらにその後も拡張が続き、19世紀末に州内の鉄道路線は合計3375キロに達した。

帝制打倒(1889年)と共和国憲法制定(1891年)によって、ブラジルは連邦制を採用した。輸出税が州財源とされたので、サン・パウロ州は、コーヒー輸出による豊かな財政を背景に鉄道建設にも積極的に取り組んだ。20世紀にはいってから1920年までに、さらに合計3435キロの路線が建設された。1920年の路線合計6810キロのうち、連邦政府の利子保証によって建設されたのはわずか580キロのみで、残りは州政府の補助金ないし利子保証などの援助を受けていた(注2)。

サン・パウロ市を集中点として、内陸の農村に放射状にひろがる鉄道網の成立は、従来内陸の中

小都市に住んでいたファゼンデイロ(コーヒー農園主)をして、生活や諸事業に便利なサン・パウロ市に移住せしめた。これは消費財市場を拡大させたばかりでなく、農園主が政治活動や、金融、商業などに参加する契機となった。またサン・パウロ市を労働市場とし、内陸への商品供給地ともした。

鉄道会社の業務は運輸のみに限られず、直接間接に内陸農村の開発に役立つ事業を行なった。パウリスタ線を例にとれば、次のような活動がみられた。(1)サントスに到着した外国移民に農園までの無料乗車を認めた(1880年代)。(2)モジ・グアス川に蒸気船を運行した。(3)ブラジルで最初の屠殺場を作った。(4)料金割引によって、家畜のサン・パウロ市への輸送を優遇した。(5)食肉輸出のため冷蔵車を運行した。(6)支線建設促進のため低利融資と安い枕木を提供した(注3)。

鉄道網の拡張とその結果であるコーヒー輸出の上昇に対応するため、サントス港の改善も進んだ。1886年サントス港湾会社(Cia Docas de Santos)が設立され、港の整備と倉庫などの関連諸施設の維持にあたった。1897年に初めて260メートルの栈橋が建設され外洋船が直接碇泊できるようになったのを皮切りに、1909年には同港は延長4720メートルの栈橋をもつにいたった(注4)。

ここで注目すべきことは鉄道に代表されるコーヒー輸出のインフラストラクチャーの建設には、一部外資の参加があったとはいえ、その資本とイニシアティブの主要部分は、共同事業を行なうファゼンデイロから出たことである。サントス・ジュンディアイ鉄道は、一団のファゼンデイロと19世紀中葉のブラジルの代表的企業者マウアー(Barão de Mauá)の企画と斡旋により、帝国政府の利子保証のもとに導入されたロスチャイルドらのイギリス資本が中心になり建設された。しかしこの路線

第7表 サン・パウロ州への移民 (1874~1929年)

年	ブラジルへの移民 (1)	サンパウロ州への移民 (2)	(2)/(1)
1874	19,942人	120人	6%
1875	11,001	3,289	29.9
1876	30,567	1,303	4.3
1177	29,029	2,832	9.8
1878	22,432	1,678	7.5
1879	22,189	953	4.3
1880	29,729	613	2.1
1881	11,054	2,705	24.5
1882	27,197	2,743	10.1
1883	28,662	4,912	17.1
1884	24,890	4,868	20.0
1885	35,440	6,500	18.3
1886	33,486	9,534	28.5
1887	55,963	32,110	57.4
1888	133,253	91,826	68.1
1889	65,946	27,694	42.0
1890	107,474	38,291	35.6
1891	216,760	108,688	50.1
1892	86,203	42,061	48.8
1893	134,805	81,745	60.6
1894	60,984	48,947	80.3
1895	167,618	139,998	83.5
1896	158,132	99,010	62.6
1897	146,362	98,134	67.0
1898	78,109	46,939	60.1
1899	54,629	31,172	57.1
1900	40,300	22,802	56.6
1901	85,306	70,348	82.5
1902	52,204	37,831	72.5
1903	34,062	16,553	48.6
1904	46,164	23,761	51.5
1905	70,295	45,839	65.2
1906	73,672	46,214	62.7
1907	58,552	28,900	49.4
1908	94,695	37,278	39.4
1909	85,410	38,308	44.9
1910	88,564	39,486	44.6
1911	135,967	61,508	45.2
1912	180,182	98,640	54.7
1913	192,683	116,640	60.5
1914	82,572	46,624	56.5
1915	32,206	15,614	48.5
1916	34,003	17,011	50.0
1917	31,192	23,407	75.0
1918	20,501	11,447	55.8
1919	37,898	16,205	42.8
1920	71,027	32,028	45.1
1921	60,844	32,678	53.7
1922	66,967	31,281	46.7
1923	86,679	45,240	52.2
1924	98,125	56,085	57.2
1925	84,883	57,429	67.7
1926	121,569	76,796	63.2
1927	101,568	61,607	60.7
1928	82,061	40,847	49.8
1929	100,424	53,262	53.0

(出所) Smith, T. Lynn, *Brazil: People and Institutions*, Baton Rouge, Univ. of Louisiana Press, 1963, pp. 122, 123.

を内陸に延長する目的をもって結成されたパウリスタ鉄道会社 (Cia Paulista de Estrada de Ferro) は、おもにファゼンデイロからなる 654 人の株主によって成立したのである(注5)。サントス港湾会社も、ブラジル人資本によるものであった(注6)。こうしてみると、コーヒー農業は一つには鉄道を通じてファゼンデイロをして多様な関連事業に関与せしめたといえるであろう。さらに鉄道網の拡張は農地価格を上昇させ、農地を担保とする農園主の融資獲得能力を高め、かれらの事業活動をますます促進した。だから鉄道会社が農地の分譲事業を大規模に行なうことも、しだいに多くなった。

2. 外国移民の大量流入による市内および州内人口の飛躍的拡大

1850年の奴隷貿易廃止後、ブラジル国内の奴隷人口はしだいに減少した。そればかりでなく、それが旧生産地に拘束されていたので、新興のサン・パウロのコーヒー生産は労働力の不足を感じた。すでに、1878年に、サン・パウロの法律は、他州からの奴隷移入に禁止的な税をかけていた。こうして、奴隷制廃止(1888年)は避けられないものであり、その廃止後実際により安価な外国移民労働力の導入が容易になったのである。

19世紀後半から、サン・パウロのファゼンデイロとその利益を代表する県政府は、ヨーロッパ移民誘致に努めた。1871年にコーヒー農園主は、「サン・パウロ県ヨーロッパ移住民援護協会」(Associação Auxiliadora de Colonização e Migração para a Província de São Paulo) を結成した。1886年には「サン・パウロ移民促進協会」(Sociedade Promotora de Imigração em São Paulo) に改組され、6000 人分の旅費補助金を県政府から受けた。この事業において、パウリスタ鉄道の中心的人物でもあった大農園主プラード (Martinho Prado) が活躍したこ

とは注目に値する。かれは協会の代表としてイタリアにおもむき移民募集にあたった。こうして、1889年から1902年までにサン・パウロ州に渡来した外国移民の4分の3は、政府から旅費支給を受けた「公費移民」(imigrantes subsidiados)であった(注7)。

サン・パウロの地方政府も移民誘致のため、農園での労働条件の改善に努め、債務拘束制に制限を加えたり、地方の警察署長を農園主の影響から解放するなどの対策をとった。さらに教会の非公教化、帰化人の権利拡大なども行なわれた。こうして、19世紀末には、たびたびヨーロッパで非難され、1902年にイタリア政府をして、ブラジルへの移民停止の措置をとらしめたコーヒー農園の労働条件も、サン・パウロ州の社会環境も20世紀初頭には、移民にとってかなり改善されるに至った。

第7表から5年ごとの期間を区切り、年平均の移民数を計算すると、サン・パウロ州への移民は、1880年代後半から急増し、1890年代後半に最初のピークに達したこと、1910年代前半と1920年代後半に第2、第3のピークがみられたことがわかる(第8表参照)。

このような大量の移民の流入は、サン・パウロ州と市の人口を増大させた(第9表参照)。

第8表 サン・パウロ州への年平均移民数

期 間	移 民 総 数	年 平 均 数
1875~79	10,005	2,001
1880~84	15,841	3,168
1885~89	167,644	33,532
1890~94	319,732	63,946
1895~99	415,253	83,050
1900~04	171,295	34,259
1905~09	196,539	39,307
1910~14	362,898	72,579
1915~19	83,684	16,736
1920~24	197,311	39,462
1925~29	289,941	57,988

(出所) 第7表から計算。

第9表 サン・パウロ市および州人口と集中度

年	サンパウロ市の人口 (1)	サンパウロ州の人口 (2)	ブラジル の人口(3)	集中度(%)	
				(1)/(2)	(2)/(3)
1872	31,385	837,354	9,930,478	3.7	8.3
1886	47,697	1,200,000*	13,400,000*	3.9	8.9
1890	64,934	1,384,753	14,333,915	4.7	10.0
1900	239,820	2,282,279	17,438,434	10.5	9.6
1920	579,033	4,592,188	30,635,605	12.6	13.2
1940	1,326,261	7,180,316	41,236,315	18.4	17.4
1950	2,198,096	9,134,423	51,944,397	24.0	17.5
1960	3,825,351	12,974,699	70,967,185	29.4	18.2
1970	6,339,000	17,766,000	95,305,000	35.6	18.6

(出所) Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística, *Anuário estatístico do Brasil*, pp. 37, 38, 42. 1886年のサン・パウロ市の人口のみ Singer, p. 58.

(注) * 推定値。

第10表 サン・パウロ市および州の人口増加率
(年平均, %)

期 間	サン・パウロ市の人口 増加率	サン・パウロ州人口の 増加率	ブラジル人口 増加率
1886~90	7.2	3.0	1.3
1890~1900	24.4	5.8	1.9
1900~20	24.8	4.8	3.6
1920~40	6.1	2.6	1.6
1940~50	5.9	2.4	2.3
1950~60	6.7	3.8	3.3
1960~70	5.9	3.3	3.1

(出所) 第9表から計算。

第8表と第10表を対比すると、移民のインパクトがわかる。第10表においては1886年から1920年までの期間、サン・パウロ州の人口増加率がブラジルのそれを上回り、1940年以後には、両者に大差がないことを考えると、コーヒーに関連した外国移民の流入が直接州人口増に反映したことがわかる。移民の影響がより劇的に反映したのは、サン・パウロ市の人口においてである。1890~1920年の期間に、同市の人口増加率は24%以上にも達した。こうしてこの時期に市の人口は約7万から約58万に、州人口は、約139万から約459万に急増した。

ここで、移民の大量流入が、サン・パウロ市の人口を急増させたメカニズムを明らかにする必要がある。なぜならば移民はコーヒー農園の労働力として導入されたはずだからである。

第1に、移民のなかには本国で農民以外の都市的職業に従事して、少しは資本を携えてきた者も少なからずおり、したがって初めから全く農園に定着せず、サン・パウロ市内に滞留した者も多かった。1879年にサン・パウロ州に到着した424人の「公費移民」のうち、198人が市内に滞留した。また1883年(1~10月)の3955人のうち1322人までもが、同じく市内にとどまった^(註8)。第2に移民の流入が一層大規模になった1880年代末以後には、サン・パウロ市は移民労働者と農園主の双方が集まる労働市場化したので、移民の市内滞留者が増えた。1888年に、有力農園主であるバルナイバ子爵(Visconde de Parnaíba)が市内に移民宿舎(Hospedaria de Imigrantes)を設置したが、それは「その大きな建物と〔その影響で〕近くの街路に開設された質素な貸間や小商店のため、市の空間的発展の一步を画した。さらに労働力を求めるファゼンデイロと、職を求める労働者が、農村から市へと間断なく動くようになった。サン・パウロは農産物や工業品の市場であるばかりでなく、労働市場でもあった。そこで、何百キロも離れた農場の労働者が雇用されたのである。^(註9)」。

第3に、19世紀末からコーヒー不況が出現し始めると、不況期には外国からの移民の流れ自体が細くなったが、他方国内では農園を離れた移民出身者が市内に集中した。農業労働者として、ある期間働いて、資金をもって、市に出てくるものも多かった。

なお19世紀末には国内の他地域からの移民は無

視しうる程度であった。1887年から1900年に、内国移民はわずか552人にすぎなかった^(註10)。

こうして急速な人口増を示したサン・パウロ市の市民の大半が移民出身者かその二世になった。かれらは概して伝統的な文化にしばられず、またブラジルの農民よりは高い教育文化水準をもっていた。かれらは労働予備軍として、のちの工業化の一要因になった。たとえば、1901年の市の工業労働者7962人のうち、半数以上に当たる4999人(62.78%)が外国人で、外国人の大部分はイタリア人であった^(註11)。移民出身者は、一般に貯蓄志向が高く、中間層出身の移民には農園や都市で資本を蓄積して、第1次世界大戦のような輸入途絶期に、機会をとらえて、修理工場や町工場を開いたものも少なくなかった。また本国との人的なつながりや移民社会の消費傾向に関する知識や本国の銀行支店からの融資を利用して、輸入商になったものもいた。当時の州政府は、農園主の代表機関であり、土地をもたぬ貧民の利益に全く考慮を払わなかった。したがって、ブラジル人大衆には、公共教育の機会が与えられなかった(現在も文盲者には選挙権が与えられていない)から、プランターとすでにある程度の教育を受けてきた移民だけが、なんらかの経済機会を利用できたのである。

移民は、工場ばかりでなく農園にあっても、自由な賃金労働者としての性格から、経済の資本主義化に貢献した。賃金の貨幣支払が普及し、経営の自給性が減少するとともに、消費市場が拡大したのである。

3. 金融商業機能の整備充実

ブラジル農業は、16世紀に開始された北東部の砂糖生産以来商業資本主義的色彩が強かった。しかし19世紀のコーヒー農業は、他の作物栽培に比べ著しく自給性が低く、それだけ資本主義的性格

を強くもっていた。

コーヒー農業は年80%という驚くべき高利潤率をもっていたが、概して小規模経営は困難であった。コーヒーの樹は、苗を植えてから4,5年目に初めて実をつける。しかも砂糖と異なり同時に食料作物を栽培できなかつた。19世紀までは高価な奴隷を多数購入しなければならなかつた。土地が豊富にあるので、地力の消耗を肥料によって補うことはしなかつたが、通例30年ごとに、相当規模の処女地を購入し、開拓し、農園の施設や道路や鉄道までも建設しなければならなかつた。19世紀中葉に長子相続制が廃止されていたので、子孫のためにも、開拓が必要だった。栽培地が、リオ市やサン・パウロ市近くであった時はともかく、内陸部に進むにつれて、10万から100万本の樹をもつほどに経営規模が大きくなったのは当然である。幸い、1850年に奴隷貿易が禁止されたあとで、サン・パウロのコーヒーが発展したので、ここでは、高価な奴隷に資本を固定させることを避け、他の事業に投資する余裕が生れていた。

コーヒー農業には、当初から商業資本との結びつきが強く認められた。コーヒー以前に繁栄した産業や地域で蓄積された資本が大きな役割を果たした。たとえばリオ地方最大のコーヒー農園主であったリオ・プレト子爵 (Visconde de Rio Preto) はミナス地方からリオ市に家畜を移入して産をなした商人であった。カルネイロ・レオン (Carneiro Leão) 家は、1748年にリオ市で始めた黒人奴隷貿易で資本を蓄積した。その他、サン・パウロ地方では、プラード (Da Silva Prado) のように、ソロカバの家畜市での取引や南北の奴隷取引で資本を蓄積したコーヒー農園主が少なくなかつた^(注12)。

19世紀後半に、農園主階級の共通の課題となった鉄道建設や移民誘致は、政治的活動さえ必要と

した。有力な農園主の中には、帝政期に政治力を得るために爵位を購入するものが続出した。フルタードの表現によれば、「土地の購入、労働力の補給、生産の組織化と経営、国内交通、港における商業化、官界との接触、財政および経済政策への介入などの広汎な戦線の闘いのうちに新しい指導階級が形成された」^(注13)のである。

これらのファゼンデイロの多くは、広汎な事業に関係する必要から、生活の本拠をサン・パウロ市に移し始めた。鉄道網の完成によって、何百キロも離れた農園へ収穫期にだけ旅行することができるようになっていた。農園主の多くが同市に集中したことは、必然的に、市の金融的政治的機能を高めた。1873年にわずか4行にすぎなかつた市内の銀行数は、1889年には外国銀行支店2行を含め7行に増えていた。銀行ばかりでなく、コーヒー仲買人 (Comissário: コミサリオ) や輸入業者もコーヒー農園主に対して融資を行なった^(注14)。

なおコーヒー生産を支えた金融活動に必要な資本の多くの部分がイギリスに代表される外国資本によってまかなわれたことは注目に値する。外資は、外国銀行からブラジル系銀行への融資、ブラジル国内にある外国系コーヒー輸出業者から仲買人への融資、イギリスの輸出業者からブラジルの輸入業者への融資など間接的でリスクの少ない方法で流入した。このような外資の参加は、今後の経済発展に、少なからぬ影響を及ぼすのであるが、いずれにしても、サン・パウロ市の金融機能を高めることになった。

サン・パウロ市は20世紀初頭には金融面ばかりでなく、商業面においても、農村部を後背地化し、支配を確立していた。当時の観察者デニスによれば、内陸の諸都市は、「コーヒーの市場ではなく、そうであったこともない。コーヒーの唯一の市場

は、サン・パウロ市とサントス市で、前者の金融業者と後者の仲買人は、コーヒー農園主と直接接触していた。内陸の諸都市は、コーヒーの集荷センターとしての機能をもたず、農村への輸入商品の流通を支配する。……各都市には、荒物、衣類、食料雑貨の店があり、農園に商品を供給する。各都市は、また金融業をも営む。農園主は、小さな地方銀行から融資を受けるが、それらの銀行は、サン・パウロ市にあるさらに強力な銀行によって支えられているのである」(注15)。

1883年の統計によれば、サン・パウロ市の商業企業として、卸売業には、輸入商社14、衣料品店24、飲食品店45、建設資材店15があり、小売業には、衣料品店90、靴店67、家具店32などがあつた。その他市民とりわけ農園主に関係のある自由業者として仲買人25人、弁護士69人、計理士45人、請願代理人 (solicitador) 11人などがいた(注16)。

このようにサン・パウロ市のコーヒー輸出農業の管理中枢としての機能の充実と平行して、地方政府の豊かな財政力の相当の部分が、そのような機能を物的に支える都市事業に投下された。すでに、1872年から75年の一知事の任期内に、県予算の半分が、サン・パウロ市の公共事業に使われていた。その後も公共事業が進められ、電信(1884年)、上下水道(1887年)、最初の発電所(1900年)などの施設が建設され、「ファゼンデイロの首都」(モンベイ)、「コーヒーのメトロポリス」(シルヴァ)にふさわしい内容を与えた。

(注1) Singer, Paul, *Desenvolvimento econômico e evolução urbana de São Paulo*, Editora Nacional e Editora da USP, 1968, pp. 29~30.

(注2) *Ibid.*, pp. 55~56.

(注3) Morse, Richard M., *From Community to Metropolis: A Biography of São Paulo*, Gainesville, Fla., Univ. of Florida Press, 1958, p. 167.

(注4) Araújo Filho, José Ribeiro de, *Santos o pórtio do café*, Rio de Janeiro, Fundação IBGE Instituto de Geografia, 1969, pp. 66, 68, 74.

(注5) Monbeig, Pierre, *Pionniers et planteurs de São Paulo*, Paris, Armand Colin, 1952, p. 86.

(注6) Araújo Filho, *loc. cit.*

(注7) Monbeig, pp. 91~92.

(注8) Morse, p. 175.

(注9) Monbeig, Pierre, *La croissance de la ville de São Paulo*, Grenoble, Institut et Revue géographie alpine, n. d., pp. 29~30. Singer, p. 37に引用さる。

(注10) Wilhelm, Jorge, *São Paulo metrópole, 65: subsídio para seu plano diretor*, São Paulo, Difusão Européia do Livro, 1965, p. 12.

(注11) Matos, Odilon Nogueira de., "São Paulo no século XIX," *A evolução urbana de São Paulo*, São Paulo, Revista de História, 1955, p. 55.

(注12) Monbeig, *Pionniers et planteurs*, p. 84.

(注13) Furtado, Celso, *Formação econômica de Brasil*, 9a. ed., São Paulo, Cia Editora Nacional, 1969, p. 124.

(注14) Singer, p. 33.

(注15) Denis, Pierre, *Le Brésil au XXe siècle*, Paris, Armand Colin, 1909, p. 110.

(注16) Matos, pp. 59, 60, 63.

IV 初期工業化期(1900年頃から~1929年まで)

今世紀にはいると、1920年代までにサン・パウロ市に全国でもリオに次ぐ規模の工業が発達し、のちに、同市がブラジルの工業中心地になる下地がつくられた。その背景には、III章で扱った同市の人口増加に代表されるコーヒー輸出経済の発展がもたらした社会経済的変容があつた。この意味でサン・パウロ市の初期工業化期の研究は、同市を拠点とするブラジルの産業革命の過程の研究につながり、重要視されなければならない。

第11表 ブラジル工業生産の地域構成(%)

年	リオ市	サン・パウロ州	サン・パウロ市(推定)*	ミナス州	リオ・グランデ・ド・スル州
1907	30%	16.5	9.9	4	14.9
1920	20.8	31.5	18.9	...	11
1938	14.2	43.2	23.7	11.3	10.7

(出所) Singer, p. 48 から作表。

(注) * 1935年の統計では、サン・パウロ市は、サン・パウロ州の工業企業の58.7%、工業労働者の56.5%、工業生産の61.5%をしめていたので、州の工業生産の60%を市の生産として推定した。

第11表から、1920年後しばらくしてサン・パウロ市の工業生産は、リオ市のそれを上回ったであろうと推定できる。この時期のブラジル経済は本格的な輸入代替的工業化期以前にあり、統一的工業市場も形成されていなかった。このためある都市の工業は、わずかに周辺の地方的な市場を対象に生産するのみであった。リオ市とサン・パウロ市の工業規模は、それぞれの後背地、地方市場の規模、経済水準を反映していたと思われるので、人口によって、それぞれの地方市場の成長を調べてみよう。

第12表から、今世紀初頭には、すでにサン・パ

第12表 リオ市とサン・パウロ市の市場規模
(1890~1940年)

年	リオ市の人口	リオ市の地方市場の人口*	サン・パウロ市の人口	サン・パウロ州の人口**
1890	522,650	1,535,532	64,934	1,384,753
1900	691,565	1,947,261	239,820	2,282,279
1920	1,157,873	3,174,572	579,033	4,592,188
1940	1,764,141	4,362,105	1,326,261	7,180,316

(出所) Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística, *Anuário estatístico do Brasil, 1970*, Rio, 1970, pp. 37~38 から計算。

(注) * リオ市の地方市場として、エスピリト・サント、リオ・デ・ジャネイロ、グアナバラの3州を想定した。** サン・パウロ市の地方市場として、サン・パウロ州を想定した。

ウロ市の地方市場の規模がリオ市のそれを上回っていたことが推定される。これは第11表の表現するものと矛盾するが、次のような要因を考慮に入れば、納得できよう。(1)リオ市は1940年になっても、サン・パウロ市より大規模な人口をもっていた。(2)さらに、中央集権的帝制の廃止(1889年)後も、リオ市は連邦政府所在地であったため、ブラジル銀行など大銀行の本店をもち、工業家の金融、活動と経済政策への影響に便利であったことも考慮しなければならない。これらの要因のため地方市場の規模劣位にもかかわらず、リオ市が全国で最大規模の工業を1920年代まで、保持することができたと思われる。

しかし1915年頃から第1次世界大戦を契機に、リオの首位はすでに脅かされていたと思われる証左がある。サン・パウロの工業の地方市場は、その頃からサン・パウロ州という枠を越え始めたのである(第13表)。だから、1930年代以後に予想されるサン・パウロ市の全国的工業メトロポリス化は、この時期の諸傾向から判断すれば、時間の問題であった。

ここで、サン・パウロ市の初期工業化の過程のなかに、地方市場対象の工業から全国市場対象の

第13表 サン・パウロ州の輸出および移出

年	対外輸出	(単位: コントス)	
		国内他地方への沿岸移出	国内他地方への鉄道移出
1911	480,900	20,365	48,615
1912	530,135	20,915	59,878
1913	490,281	26,866	59,822
1914	352,949	24,498	30,922
1915	465,213	48,263	102,797
1916	489,632	59,582	131,177
1917	422,334	69,989	327,563
1918	371,446	84,596	218,083

(出所) 原資料: *Anuário estatístico de São Paulo, 1911~1918*. 引用は, Dean, Warren, *The Industrialization of São Paulo, 1880-1945* (Austin, 1969), p. 97.

工業への転換を示唆するような構造的な変化がみられるか否かを調べなければならない。

サン・パウロ市の初期工業化はかなり順調に進展し、とくに、1914~19年の第1次大戦期に、構造的な変化を示した(第14, 15, 16, 17表参照)。あいにく、市内のみの工業統計は入手できなかったが、州内工業の半分強を市内工業の規模と仮定して、論を進める(第11表の注参照)。

第14表 サン・パウロ州の主要工業企業(1901年)

部 門	企 業 数	雇 用 労 働 者 数
織 維	19	900
治 金	14	約 2,000
家 具	13	
飲 料	10	700
衣 服	8	80(6企業)
帽 子	7	800
製 粉, マカロニ	7	
靴	5	1,058

(出所) 原資料は, Bandeira Jr., Antônio Francisco, *A indústria no estado de São Paulo* で, Vita, Luis Washington, "A Industrialização em São Paulo," em *São Paulo; espírito povo instituições*, eds. J. V. Freitas Marcondes e Osmar Pimental, São Paulo, Pioneira, 1968, p. 196 に引用さる。

第15表 サン・パウロ州の工業(1907年, 1920年)

	企業数	資 本 額 (コント)	生 産 額 (コント)	労 働 者 数
1907	326	127,702	118,087	24,186
1920	4,154	537,817	986,110	83,998

(出所) Dean, p. 91.

第16表 サン・パウロ市の工業生産

年	実 質 指 数
1 9 1 4	1 0 0
1 9 1 5	1 1 9
1 9 1 6	1 4 5
1 9 1 7	2 0 6
1 9 1 8	1 8 1
1 9 1 9	2 2 6
1 9 2 0	2 0 6

(出所) Dean, p. 92.

第17表 サントス港経由の輸入の品目別変化
(1909~1918年) (単位: 1000米トン)

品 目	1909~1913年	1914~1918年	減少(%)
機 械	136	37	73
鉄 鋼 製 品	536	148	70
鉄 鋼	98	33	66
木 綿 製 品	13	5	62
化 学 薬 品	58	33	43
紙 ・ 紙 製 品	48	45	6
食 品	1,008	943	6

(出所) Dean, p. 90.

第15, 16表から、第1次大戦期に工業企業数、資本、生産、労働者数に大きな増加がみられたことが明らかであり、第14表と第17表から、20世紀初頭の繊維、食品などが中心であった工業の構成が、重化学化したことが考えられる。そして、この工業構成の高度化が、サン・パウロ市を、のちに、全国的工業メトロポリスとした最も重要な要因であると考えられる。なぜならば、初期のいわば自然発生的輸入代替工業は、重量比価格の低い生活必需品が中心であったから、国内市場においても、各都市が自給したほうが有利であった。しかし、重化学工業製品は、重量比価格が上昇するとともに距離の影響がうすれ、さらに規模の経済の効果が出現し、先進工業地域の優位は、いったん確立すると打破しにくくなるのである。

最後に、サン・パウロの初期工業化を促進した一般のおよび特殊的な要因はなにであったかを調べよう。

一般的要因としては、(1)コーヒー経済の輸入能力の低下に対応する通貨切下げ政策、(2)第1次世界大戦期の先進国からの輸入の途絶などがあげられる。(1)は、フルタードのいうように「損失の社会負担化」(socialização de perda)であり、コーヒー輸出の行きづまり(第2図参照)が生じるたびに、外貨所得に損失を受けた農園主階級の国内所得を保証する政策であったが、副産物として一方

では国内の有効需要の水準を維持し、他方では、輸入工業品の価格を引きあげて、国内工業に刺激を与えたのである。

地域的な特殊的要因としては、(1)サン・パウロ市に、資本、労働力という生産要素、運輸(鉄道)網、消費市場、金融市場という社会間接資本ないしインフラストラクチャーをそして、それらを結合させ機能させるファゼンデイロと移民出身の企業者層といういくつかの経済発展の要因が集積したこと(Ⅲ参照)、(2)サン・パウロ市の初期工業には、移民、ファゼンデイロ、輸入商などの多様な企業者集団が参加したが、それらの異なる利益集団の間に本質的に敵対的対立がなく、工業化を抑圧する政策が回避されたこと、などである。(2)については、ディーンの実証的な研究^(注1)があるので、詳しい説明は省略したい。要するに、サン・パウ

ロ市に居住するようになった農園主が金融、商業、政治などだけでなく、工業にも進出する一方、移民出身の輸入商や工業家も、成功すると、社会的承認を求めて、農園を購入したり、農園主階級と通婚したりして、結局、元来多様な企業者集団が社会的に結束度を強めた。工業化に敵対的であってもよい輸入商も、ブラジルの輸入能力の減退や第1次大戦期の輸入途絶に対応するために、工場を所有し、支配下にある市場に、自ら生産した商品を供給し始めた。こうして、1919年には、サン・パウロ州議会で、工業利益の代表者が多数派になり、関税引下げ案を否決したのである。

(注1) Dean, Warren, *The Industrialization of São Paulo, 1880-1945*, Austin, Univ. of Texas Press, 1969.

(以下第II部、続稿) (調査研究部)

アジア経済研究所刊行

華僑経済の研究

游 仲 勲 著

すぐれて商品経済的特徴をもつ華僑経済を、その産業構造、資本額の推定、企業形態、さらには社会経済組織、階級構成とその経済支配の状況、居留国政府の対華僑政策にまで及んで考察

430頁/¥1200

海外アルミ資源の開発

西 尾 滋 編

アルミニウム工業の現状と課題を概観し、さらに資源国の開発状況を国別にとらえる

324頁/¥1000

モンゴルの政治と経済

坂本是忠著

躍動するモンゴルを、その自然と住民・歴史・政治・経済全般にわたって多角的に概観する。巻末資料…人民共和国年表、憲法、党綱領他

200頁/¥ 650

ラッフルズ——その栄光と苦悩

M・コリス著/根岸富二郎訳

シンガポール建設者として、同時に、東洋学者、動植物収集家としてアジアに不朽の名を残したスタンフォード・ラッフルズの栄光と苦悩の生涯

270頁/¥ 380

アジア経済出版会発売